

第12回学術大会抄録

5 歯科衛生士業務に必要な「歯科衛生過程」を理解させるための初年次教育の試み

本間 和代

明倫短期大学 歯科衛生士学科

keywords : 歯科衛生士業務, 歯科衛生過程, 理解, 初年次教育

はじめに

歯科衛生士が行う歯科衛生業務は、すべてのライフステージにある人びとを対象として、歯や口腔の機能の維持・向上を図り、QOLを高めるための支援であることから、科学的根拠に基づく業務の展開が求められる。そのためのツールとして、近年、「歯科衛生過程」を活用した歯科衛生士教育が行われるようになった。本学では、歯科介護に続き、歯科保健指導や歯科予防処置業務にも導入することを目指しているが、初年次からその概念を学生に理解させることを試みた。

対象および方法

対象：本学歯科衛生士学科1年女子50名である。

方法：夏期休暇中に家族の一人を被験者として、歯科衛生過程に基づく歯科保健指導を実施した。

内容：1. 歯科衛生アセスメント, 2. 歯科衛生診断, 3. 歯科衛生計画立案, 4. 歯科衛生介入, 5. 歯科衛生評価, の手順により実施

結果および考察

1. 被験者の分布と協力度

被験者として協力した家族の分布は、母が21人、妹が12人、姉が7人の順に多く、50人中43人（86%）が女子であることから、学生が依頼しやすく、協力度が高いのは同姓であることが伺える。

2. 歯科衛生アセスメントの結果

アセスメントの結果、抽出できた口腔内の問題点は図1に示すとおりである。歯石沈着や歯垢・食渣等、口腔内の汚れをチェックできたのは、入学4か月ですでに個人口腔衛生を学び、自身も実践していることから気になったものと思われる。歯列不正や歯肉腫脹、口臭等はまだ学習していない時期であるが、

問題点として抽出できたことは、入学後、歯・口腔に関心をもち始めていることが伺える。

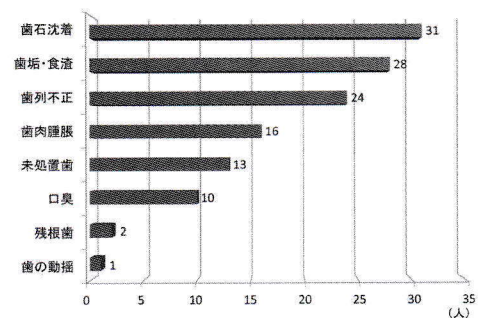


図1 歯科衛生アセスメントによる口腔の問題点

3. 歯科衛生評価

抽出した問題点に優先順位を付け、実際に介入した結果、図2に示すとおり、歯磨きの意識・方法・回数等の向上が著しく変化したほか、フロスの使用や歯肉の炎症減少など、対象者に変化が現れた。家族の口腔環境を良くしたいという想いが伺える。

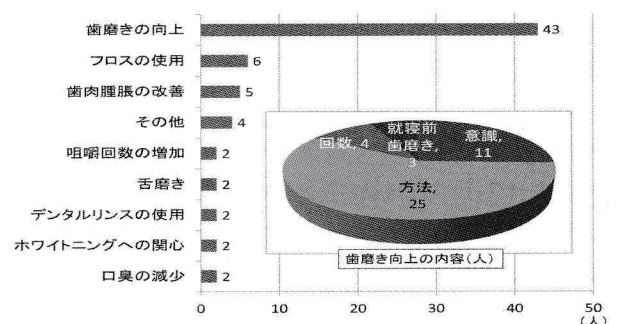


図2 歯科衛生評価（対象者の変化）n=68

まとめ

学生にとって、家族の口腔を観ることは初の経験であり、被験者も含め照れ臭さが伺えたが、歯・口腔の問題点を抽出したことで、家族の歯・口腔に関心が出てきて、自分の歯科保健指導で改善していくために、もっと勉強し、実力をつけたいという目標に繋がった。